

# 躍動するアマチュアたち

## 20世紀転換期のイギリス音楽界

元お茶の水女子大学基幹研究院研究員 西阪多恵子

19世紀末から20世紀初頭にかけて、イギリスの音楽界ではアマチュア論議が盛り上がった。長年にわたって家族や友人間で音楽を楽しんできたアマチュアの活動は、産業経済の著しい発展と共に、内輪の域を超え、演奏者や教師として公に目立つプロにとって時に目に余るようになったのである。

もっとも、プロとアマチュアの区別は明確ではない。一般的には、当時も今日と同じく、音楽を職業とするか否かで区別されたが、例えば、裕福な御曹司メンデルスゾーンはアマチュアか、といえ、当時も今も大抵の人が首をひねるだろう。それでも区別はあった。両者はいくらか緊張をはらみつつも、友好的な関係を様々な場で発展させていった。本稿では第1、2章でその一端を代表的な音楽雑誌『ミュージカル・タイムズ』(*Musical Times* 以下 *MT*と略記。引用の出典は、特記のない限り *MT*の発行年月)の記事に探り、第3章でアマチュア主体の活動から実りある一例を紹介する<sup>※</sup>。

### 1 アマチュアは身をわきまえよ アマチュアの本分は？

*MT*の投稿欄には、アマチュアの積極的な活動に困惑するプロの声が折々に載った。「アマチュアが演奏会のためにホールを先に借りてしまう」(1874.1)、「セミプロが音楽教師として安く売り込んでプロの仕事を奪う……大抵理論的知識のない若い女性だ」(1883.9)。アマチュアがプロを経済的に圧迫するという懸念を抱いたのは、プロの音楽家だけではない。シェイクスピア研究者で、ベルリオースの管弦楽法などを英訳した元 *MT*編集者のメアリ・クラークによれば「嬢が慈善のために演奏会の売上を寄付するのはよいが、音楽で生計を立てるプロを忘れてはならない」(1888.9)。また、音楽のレベルも問題だった。土木工学教授で音楽博士の学位も持つウィリアム・ポールいわく、「アマチュアの演奏はプロの基準に達しないのだから、私的な場に限るべし」(1883.8)。同様に、「演奏技術は不十分、音楽的センスもないのに、公にやりたいというアマチュアが増えて、音楽のレベルが全体に下がり気味だ」(匿名あるいは架空の鼎談 1890.3)

アマチュアはプロより劣るという前提もまた論議の的だったが、ともあれ、このような発言の頻出から、当時いかに多くのアマチュアが精力的に活動していたかがうかがえよう。

ところで、こうした議論で想定されているアマチュアは、主に経済的にも時間的にも余裕のある社会層の人々である。そうした人々への期待は、経済面など社会的に有利な立場を音楽家の支援に役立てること、つまりパトロンとしての活動であった。アマチュアはプロを支えて自らの楽しみをも増す。かつて才能ある音楽家は、アマチュア音楽家である宮廷貴族の庇護の下に音楽を創り出してきた。19世紀にそうした音楽家とパトロンとの関係は衰退したが、その伝統は形を変えて生き続けた。多くのアマチュアは、演奏会のチケットや楽譜を購入し、子どもに音楽を習わせるだけではなく、音楽学校やコンクール、貧困層のための演奏会等への関与や寄付によって、音楽家の育成や一般の音楽生活向上に寄与（しよう）した。総じてアマチュアは、特定の音楽家のパトロンから広く人々の音楽のパトロンへと変容したのである。

## 2 プロの音楽家は男らしい？ アマチュアとジェンダー

しかしながら、個々にはアマチュアもプロも多種多様である。いずれともつかない者や、経済的な必要に迫られてアマチュアからプロに転じる者も少なくなかった。その境界線に重なるように、厄介な女性像が彷彿する。「数多くの無能な プロ の音楽教師は……主に女性であり、はした金のために教えて市場相場を下げ、優れたプロの状況を困難にする」(投稿欄 1929.12)。興味深いことに、この無能な プロ の場合も前章で挙げたセミプロや〇〇嬢と同様に、例に挙げられているのは女性である。

実際、アマチュアやセミプロの女性音楽家とくに音楽教師の増加は、19世紀末以来著しかった (Ehrlich: 235)。音楽は女性の嗜みという社会規範や、アップライト・ピアノの普及を背景に、1860年代頃からロンドンを中心に音楽学校が続々と設立された。フランスやドイツの主要な音楽学校と異なり、女生徒が男子より多いのが常だったが、卒業後にプロとなる者は少ない。音楽市場の過剰競争のみならず、仕事で収入を得るのは中流層以上の女性にふさわしくないとされていたためでもある。一方、プロの男性にとって女性のプロは、厄介な存在だった。そもそもプロフェッションとは、神学や医学など権威ある教会や大学に結びついた専門職である。後に技術者や建築家もプロとみなされるが、音楽家はそうはいかない。巧みに歌ったり弾いたりしても、所詮は教養低い者という通念は根強く、プロとして社会的に認められそうになかった。さらにその困難に拍車をかけたのが、音楽と女性との結びつきである (Rohr 2001: 46)。古来、音楽は情感や身体との関連から女性的なものとされてきたうえに、他の専門職と異なり、音楽では女性のプロが公然と活動していた。これではなおさら、他分野のプロと肩を並べるわけにいかない。プロは男性の領分ではないか

そうした状況を背景に、男性的な男性というプロ音楽家像が造られていった。プロ界から女性が排除され、アマチュアには女性的なイメージが印象付けられるというように。例えば、音楽家の利益を守るために1882年に設立されたプロ音楽家協会は、「真正のプロ音楽家限定」(1882.8)だが、女性の入会は認められなかった。また、「上流ないし中流の女性は大抵未熟なアマチュアとみなされた」(Fuller

1998:135)。かたや「音楽家の男らしさ」と題する匿名記事は、「音楽家は男らしくないという偏見は衰えてはいるがまだ残っている」(1889.8)として、次のように断言した。「女々しさと気まぐれは音楽家の本質的性格からかけ離れている……音楽家は男らしさを示すほどよい音楽家なのだ」(同前)。そうではない(つまり女々しい)音楽家の周りには、同類の輩が集まる。「低能なおどけや甘ったるい調子で楽器を汚すヴァイオリニストもいる……そうした<sup>ドロイングルーム</sup>客間の困り者の周りに青白いディレタントが群がる。情緒的で男らしさがなく、騎兵隊にいたこともクリケットをしたこともない者たち…」(同前)。<sup>ドロイングルーム</sup>客間は本来女性が過ごす部屋であり、当時の典型的な中流家庭では娘の弾くピアノが置かれる部屋でもあった。女性的なイメージを喚起する場である。また、もともと「楽しむ人」を意味する「ディレタント」は、「愛する人」を第一義(オックスフォード英語辞典)とする「アマチュア」の類義語であり、いずれも本来、軽蔑的な意味はなかった。だが、ここで描かれる男らしさを欠く青白いディレタントは、技量のみならず音楽に向き合う姿勢も劣るアマチュアを思わせる。同時にプロとアマチュアの関係は、強化されつつあった性別領域分担、すなわち男性は公的な場で働き、女性は私的な場である家庭を守るという社会規範に重ねあわされた。さらに、個性や自己主張が求められる男性に対し、女性は慎ましく男性を支え、調和を重んじるという性規範もまたそのイメージを補強しただろう。

しかし、アマチュアはプロの音楽家を支えただけではない。アマチュアの活動はプロを招き入れ、人々に音楽の喜びを伝え、広く音楽生活の向上をめざした。その際立った例を挙げよう。

### 3 アマチュアは結ぶ 音楽コンペティション・フェスティバル

20世紀への転換期から戦中にかけて、アマチュア論議がやや沈静化した頃、MT上には音楽コンペティション・フェスティバルに関する記事が目立つようになった。長期にわたって隆盛をきわめたこの催しの発端は、1885年8月、イングランド北西のウェストモーランドでメアリ・ウェイクフィールド(1853-1910)が自宅で催した参加者わずか3組の合唱コンペティションだった。ところが翌年の参加者は21組、3年目にはウェイクフィールド自ら遠方の村々の小さな合唱団を指導して回り、合同演奏が実現した。音楽コンペティションは「全国に花咲くように広がり、救いようのないほど音楽的に不毛とされていた地域にも行き渡った」(Newmarch: 71)。それまで互いに気づかなかった無数のアマチュアの活動は噴き出したかのように周囲に及んだ。1904年には音楽コンペティション・フェスティバル連盟が結成され、1906年のコンペティション参加者は約4万人に達した(1906.6)。

創始者ウェイクフィールドは、裕福な実業家の娘である。一流のプロ歌手になりうる資質に恵まれながら、プロへの道を断念した。数多くの慈善演奏会で歌手としての実績を積み、実力を高く評価されてきただけに、悩んだのだろう。収入を必要としない“いいところの娘”がプロになるのは、生活のために闘う女性たちの領域を侵すことではないか、と(Newmarch: 33)。果たして彼女は別の道を選んだ。その道は、連盟の目的「人々に音楽への愛を吹き込むこと」(1904.6)につながった。

1908年8月からMTに連載「コンペティション・フェスティバル記録」が始まり、毎月、合唱を中心に各地の様々な音楽コンペティションの様子が報道された。それぞれ課題曲もある。バッハやヘンデルから、現代のイギリス作品、民謡編曲まで様々だ。合唱の隆盛に刺激され、管弦楽も盛り上げようとの声も上がった。年次大会に集う各地の代表者にはプロもアマチュアも混じり、女性も多い。各地で新たに生まれたフェスティバルの発起人は大抵女性だった(1908.8)。男性だけになりがちなプロの音楽家組織とは対照的に、アマチュア主体の組織では女性の活躍が目立つ。

ウェイクフィールドは、フェスティバルのヒントを得たある地方の演奏会についてこう記した。「会場の熱気は、芸術への愛想笑いではない。田舎の舞踏会や農業見本市を支える精神と同じ“私たちの社会”への関心だ。社会的に欠かせず、音楽的にもよい結果となる」(1884.3)。地域共同体のこうした連帯感は、女性が支える家族の絆のようではないか。家庭で家族の関係を大切にする女性の役割は、地域に広がると共に、私的な場を開いて公的な場に音楽をもたらし、地域の人々の新たな関心と呼ぶ、アマチュアの役割に重なった。もちろん女性に限らない。また、多くのプロ音楽家も指導や運営、審査に加わった。音楽の楽しみを広めようと行動するプロも多い。だが、活動の実質的な担い手は、大抵アマチュアである。

アマチュア主体の音楽コンペティション・フェスティバルは、音楽と生活を結び、公私を結び、さらにプロとアマチュアと各地の一般の人々をも結んだ。アマチュアはそれぞれの間において行き来し、媒介となった。音楽コンペティション・フェスティバルの報道記事に、無数のアマチュアが躍動する。音楽を愛し、音楽の喜びを多くの人々とわかちあうアマチュアたちである。

注) 本稿第1、2章のアマチュア論議及びアマチュアとジェンダーの関係について、詳しくは拙著『クラシック音楽とアマチュア W.W.コベットとたどる二十世紀初頭の音楽界』(青弓社 2018年)を参照されたい。

#### 引用・参考文献

Ehrlich, Cyril. *The Music Profession in Britain since the Eighteenth Century: A Social History*, Oxford: Clarendon Press, 1985.

Fuller, Sophie. *Women Composers during the British Musical Renaissance, 1880-1918*. Dissertation, University of London, 1998.

Newmarch, Rosa. *Mary Wakefield: A Memoir*, Kendal: Atkinson and Pollit, 1912.

[http://www.mwwf.org.uk/uploads/1/6/7/5/16759368/mary\\_wakefield\\_memoir.pdf](http://www.mwwf.org.uk/uploads/1/6/7/5/16759368/mary_wakefield_memoir.pdf)

Rohr, Deborah. *The Careers of British Musicians 1750-1850: A Profession of Artisans*, Cambridge: Cambridge University Press, 2001.